

ピア・サポートにおける仲間と共通性に関する考察

ー犯罪者を家族にもつ人びとの「回復」の物語からー

筑波大学大学院人文社会科学研究科 氏名 高橋 康史 (8243)

キーワード3つ：ピア・サポート、「回復」の物語、共通性の認識

1. 研究目的

ピア・サポート (peer support) とは、「ある人が同じような苦しみを持っていると思う人を支える行為、あるいは、そのように思う人同士による支え合いの相互行為」(伊藤 2013: 2) である。その中心的な場は、セルフヘルプ・グループであり、そこでは参加者らが共有する「共同体の物語 (Community narrative)」が重要な意味をもつ。ここでいう共同体の物語とは、セルフヘルプ・グループの参加者が語り合うことによって産み出される物語であり、その物語の類似性を指す。そして、この共同体の物語が、セルフヘルプ・グループの参加者それぞれの物語に取り入られていくことによって、参加者は自己の物語を獲得していくのである。これまでの社会福祉学的研究では、セルフヘルプ・グループやピア・サポートにおいて、「同じ体験をもつ他者」という仲間が共通性の認識に重要な意味をもつことが明らかにされてきた。

ところで、報告者はこれまで、犯罪者を家族にもつ人びとの「回復」に関する研究を行ってきた。犯罪者を家族にもつ人びとへのインタビュー調査を進めるなかで、彼／彼女らの「回復」の物語においてピア・サポートの発見が語られているものの、それがこれまで論じられてきたピア・サポートにあてはまらない内容であることに気がついた。とりわけ、ピア・サポートの仲間が「同じ体験をもつ他者」でないという点に特徴がある。

そこで、本報告では、犯罪者を家族にもつ人びとの「回復」の物語を検討することによって、ピア・サポートにおける仲間と共通性をめぐって、再検討・考察を試みる。

2. 研究の視点および方法

ピア・サポートを活用した援助をめぐる研究においては、ピア・サポート (あるいはセルフヘルプ・グループ) の本質は、援助者による意図的な創出ではなく、当事者同士の自発的な集まりに見出されることが明らかにされている (岡 1992)。そこで、本報告では、犯罪者を家族にもつ人びとの「回復」の物語それ自体に焦点を当て、ピア・サポートがどのように語られるのかを描き出す。具体的には、彼／彼女らの「回復」の物語において、ピアがどのように生成され、そしてその物語にピアがどのように関与しているのかを、20名の調査協力者のうち3名の語りを参照することによって明らかにする。

3. 倫理的配慮

インタビュー調査は、「日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守し、以下のような手続きで行った。第1に、書面を通じて調査協力者に調査研究の主旨・目的を説明した。第2に、調査において遵守する事項をまとめた「誓約書」を手渡した。その上で、第3に、書面での署名を通じて同意を得た。そして同時に、「同意撤回書」を手渡した。なお、インタビュー調査は、筑波大学人文社会系研究倫理審査委員会の承認を受けたうえで、実施した。

4. 研究結果

経験的データの検討を通じて、以下の様な2つのことが明らかになった。

第1に、ピア・サポートの生成についてである。犯罪者を家族にもつ人びとは、「回復」の物語において、必ずしも同じ体験をもつ人びととの出会い（＝犯罪者を家族にもつ人びととの出会い）を経験しているわけではなかった。むしろ、彼／彼女らの日常生活において、同じ体験をもたない他者との出会いが重要な意味をもっていた。具体的には、同じ体験をもたない他者との自己に関する体験を聴くことによって、自己との体験の類似性を見出し、彼／彼女らは「回復」の物語を生成していた。

第2に、ピア・サポートの成立についてである。犯罪者を家族にもつ人びとは、他者に自己の体験を語らなくとも、彼／彼女らなりのピア・サポートを得ていた。従来、ピア・サポートは「(1) 苦しみに関して何かを語り、またそれを聞く（聴く）ようなコミュニケーションの場が形成されていること、(2) 語り手および聞き手（聴き手）の立場を互換できること」（伊藤 2013: 6）を基本的な構成要素としてきた。一方で、ここでは「語り手」としての立場がなくともピア・サポートが成立していたことが明らかになった。

5. 考察

以上の犯罪者を家族にもつ人びとの「回復」の物語の検討から、ピア・サポートは、同じ体験をもつ場合だけでなく、同じ体験をもたない他者の物語を「聴く」ことによって、自己の体験との共通性を認識し、生成されることが明らかになった。報告当日は、ピア・サポートをめぐる理論的な再検討・考察を行うとともに、実践的なインプリケーションを提示することを試みる。

文 献

伊藤智樹（2013）「ピア・サポートの社会学に向けて」『ピア・サポートの社会学：ALS、認知症介護、依存症、自死遺児、犯罪被害者の物語を聴く』伊藤智樹編、晃洋書房、1-32。
岡知史（1992）「日本のセルフヘルプグループの基本的要素『まじわり』『ひとりだち』『ときはなち』」『社会福祉学』33(2), 118-36。